響きあう声：アメリカ文学における女性の表象と抗拒の言説

伊藤淑子

要旨

本論文の目的は、男性中心主義を歴史的事実とプラグマティックに受けとめ、1）その環境のなかで、女性たちがことばを発するために作りだしたロジックとレトリックを明らかにすること、2）男性作家による作品も含め、文学作品にあらたな補助線を引くことにより、作品に隠された女の声を浮かびあがらせること、3）年代順にたどるだけではみえてこない女性の言説の相互関連性を見出すことにある。現在では、セクシュアリティの多様性をめぐる社会運動が活発になり、性的指向による差別的な処遇や意識が問題として論じられるようになった。男と女という性の二元的なカテゴリーを前提として始まったフェミニズは、すでに時代遅れであるという印象を与えることすらあるが、近代以降の社会システムが男性中心に構築され、それがいまも機能している状況に鑑みれば、「フェミニズムが問題にしてきたことがすでにすべて解決された」とはいいがたい。たしかに、先進諸国においては、法的な「ジェンダー平等」は整備され基本的な権利は男女を問わず保障されるようになったといえる。それでも、歴史的な慣習は依然として存続し、「言説的な男女の差異」は維持されたままである。むしろ、フェミニズムが問題にしてきた性に基づく人間存在の規定は、法の表面的な文言ではなく、意識下に沈み、なおいっそう自己認識に作用し、アイデンティティにも役割の遂行にも影響を与えつづけている。

文学は「フィクション」であり、出来事の事実を記述するものではない。だからこそ、意識下で作用する力がどのようなものであるかを浮かびあがらせ、可視化するのに有効な「言説空間」であるといえる。フェミニズムという視点から、文学という想像の空間を分析することによって、自己の存在が受ける抑圧を明らかにすると同時に、文学がどのように自己を解放する場になりうるかを問うことが、本論文の目的とするところである。

これまで、フェミニズムはつねに矛盾のなかにあった、といえる。「女とは何か」という問いは、世界は「男」と「男ではない者」でできていることを前提に、「男ではない者」として「女」を規定する言語のなかで、まさにその言語によって語られてきた。バーバラ・ジョンソンは、*A World of Difference*（1987）で、現実世界のあらゆるところに仕掛けられた「二項対立」が制度的な境界線を形成し、その制度化に対する批判も制度のなかに取りこまれざるをえないことを問題にする。そのジレンマを乗り越えるためには、「テクストの自明性を疑う問いを加えなければならない」と彼女はいう。さらに、彼女は「文学のキャノン」という制度を脱構築し、キャノン（聖典）が排除してきた「女」である「わたし」という否定的な自意識によって獲得したアイデンティティもまた「わたし」を構成するものにほかならないと主張し、「ブリコラージュ」を提唱する。すなわち、複雑な相互作用に置かれた問題を問うためには、「一つの立場を貫くことよりも、多種多様な立場を取りいれてみることが必要だ」というのである。一つの理論ではなく、一つの文体

ではなく、一つの視点ではなく、次つぎと立場を変え、違う声を、違う手法、違う論理、違う修辞で発することにこそ、「言語にからめとられないあらたな地平へと歩みだす可能性がある」ということになる。試行錯誤を肯定的に実践するということにこそ、フェミニズム批評の活路があるとジョンソンは強調するのである。

「ジェンダー法学」のドゥルシラ・コーネルが *The Imaginary Domain* (1995)で提唱する「イマジナリー・ドメイン」に、同様の可能性を見出すことができる。彼女が「イマジナリー・ドメイン」ということばで表現しようとしているのは「女性の人格（パーソン）を萎縮させる意識下の制約からの解放の場」である。歴史的にみても、法は男女に均等な権利を認めてはこなかった。その後遺症は女性自身の自意識や自己評価にも残り、平等と自由という相反的な方向からの権利の要求は、フェミニズム内部に分裂をもたらしてきた。不毛な分裂を回避し、「性がどのように内面化されたアイデンティティの基盤になるのか」ということを問い、自由に自己の「ペルソナ」をいわば「試着する」空間を作らなければならないとコーネルは主張するのである。

フェミニズム批評は、⑴キャノンから除外された女性作家を再評価することと、⑵キャノンのなかで作りだされた偏向した女性像を問い直すという、大きくは二つの目的をもって展開してきた。その背景には、1960 年代に盛り上がるさまざま運動とも連動しながら繰り広げられた「第二波フェミニズム」のうねりと、構造主語、ポスト構造主義、脱構築主義、ポストモダニズムといった諸理論の出現がある。既成の価値観や制度に対抗する理論は、数多くの批評方法を生みだした。「フェミニズム批評」はそれらのうちの一つとして位置づけることができるが、ピーター・バリが *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory* (1995) で指摘するように、運動自体が「文学的な性質」をもつものであった。主流のキャノンにおいても大衆文学においても、文学はつねに女性イメージを作り上げる場であった。バリは、フェミニズムが「文学が作りだした女性イメージに対抗することが重要な課題である」と認めていたことを指摘する。女性イメージの生成に大きく関与してきたのが文学であり、フェミニズムはその始めから文学的な要素を中心にもつ運動であったとバリは論じる。

歴史のあらゆる段階で、女性の問題を女性自身が意識せざるをえず、フェミニズムにおける女性イメージへの問いかけは、1960 年代以前に遡ることができるが、1960 年代に批評理論が活発にその方法と課題を展開するまで、女性の問題を問う異議申し立てから生まれた女性イメージや、数多くの女性作家が書き綴った文学作品に描かれた女性像がアカデミックに顧みられることはなかった。そのような状況のなかでニーナ・ベイムの *Woman's Fiction* の初版が 1978 年に出版されたことは、アメリカ文学史のキャノンを読み直す画期的な契機であったといえる。フェミニズム批評に基づいて、「ペルソナ」の再評価をもとに、「イマジナリー・ドメイン」としての文学を論じる本論文が、ベイムに負うところも大きい。

以上が本論文の全体な構想である。以下に各章の論述内容を述べる。

各章のテーマは文学のテクストの連続性を示すことを意図している。フェミニズムということばの出現よりもまえに、女性の権利を求める問題意識はあった。その言説がより明確な権利の主張へとつながり、その流れは地域や文化を超えてつながり、たがいの意識を高めていった。過去はつねに現在を規定するものとしてあり、時代の変化が過去の問いを帳消しにすることはない。その意味において、文学はつねに過去の産物でありながら、未来において読み直されるものである。

本論文が論じるのも、文学のテクストの連続性である。第１章で「女」をめぐる議論の歴史的な背景を確かめたうえで、第２章ではアーネスト・ヘミングウェイの遺作である *The Garden of Eden* を、あえて女性のキャラクターであるキャサリンに焦点をあてて分析する。編集者の手が入った作品は、口承文学と同様に、作者の存在をあいまいにするが、この作品がヘミングウェイの隠された作品として話題を呼んだことも事実である。ヘミングウェイによって生まれ、編集者によってトリミングされ、キャサリンが性的倒錯から精神の破綻にいたるあいだにどのようなペルソナとなり、どのような声を発したのかを考える。無意識の男性中心主義によって構築された文学的世界において、キャサリンはルソーが描いたエミールにとってのソフィとなる。女性の献身を利用することも、無用になれば排斥することも、男性的視点からは合理的である。それでもなお、キャサリンの声に耳を傾け、作品の外にその声を余韻として残すことを可能にするのがフェミニズム批評の読みの可能性であろう。作家論を超えるところに、フェミニズム批評による分析の可能性がある。続いて第３章では、アメリカ文学のキャノンの中心に位置づけられてきたもう一人の男性作家であるナサニエル・ホーソーンの *The Marble Faun* に描かれる女性像を分析する。ホーソーンは知性的な女性像の描写に、同時代のマーガレット・フラーのイメージを利用していると指摘されるが、ホーソーンの作りだす物語空間において、作家の目論見とは異なるペルソナが出現することを検証する。

第４章では、ホーソーンの女性像のモデルにもなったといわれるフラーに注目し、そのフェミニズムの語りを分析する。フラーは同時代の女性に対する規定に対抗し、多くのペルソナを作りだした。19 世紀前半のアメリカの啓蒙主義思想と超絶主義的なロマンティシズムの言説をフラーは利用し、それを変換したり異化したりすることによって、独自のフェミニズムの言説を作りだした。フラーの論述的な戦略によって、アメリカにおけるフェミニズムは言論のかたちを得たといえる。第５章ではふたたびホーソーンの *The Scarlet Letter* の処刑台の役割に注目し、そこに立つことは舞台に立つのと同様のパフォーマティブな効果があることを論じる。ヘスターからディムズデイルへと舞台に立つ人物は交代するが、あらたな自己を演じ、意志を表明し、刹那的ではあっても、声を獲得することを可能にするのが処刑台であると分析する。

舞台の上で別の人格となり、あらたなペルソナを獲得することができるならば、スーザン・ソンタグの *Alice in Bed* が戯曲として創作されたことにも意味があるといえよう。第６章では、*Alice in Bed* に登場するフラーが戯画化されていることに注目し、初期の短編

作品や「キャンプ」論をソンタグの問題意識のルーツととらえ、また *The Volcano Lover* の物語構造を分析し、記憶や歴史における時間の異化と失敗による逆説的なアイデンティティの獲得を論じる。

リディア・マリア・チャイルドの *A Romance of the Republic* においても舞台はあらたなペルソナを獲得する空間として機能する。第７章と第８章では、人種と階級に注目し、その境界から生まれるペルソナの可能性を論じる。*A Romance of the Republic* では、白人女性として育てられながら黒人差別に直面する姉妹が白人のコミュニティにふたたび迎えられることによって苦難を乗りこえていくのに加え、黒人としてのアイデンティティに立脚してなお自立を実現する黒人女性の未来も描かれている。レベッカ・ハーディング・デイヴィスの“Life in the Iron Mills”においては、移民労働者である女工に言語の壁を越えさせるための仕掛けとして、語り手の創出に注目する。語り手は代弁者であり、女工の声にはなりえないが、語り手が獲得するペルソナは美的な感覚の多様性を照らしだし、中産階級的な言説ではとらえきれない感情があることを示していると論じる。

このようなテクストの連続的な読解を踏まえて、女性の全人格的な存在を実現する場として、マーガレット・フラーの *Summer on the Lakes, 1843* と *Woman in the Nineteenth Century*、またゾラ・ニール・ハーストンの *Their Eyes Were Watching God* が、理想的な結婚をあげていることを論じて議論のしめくくりとする。オールラウンドで調和のとれた人格になるために、結婚がメタファーとして提示される。かなえられることのない理想であったとしても、具体的なイメージが描かれることには意義がある。超絶主義的なロマンティスズムがフラーとハーストンをつないでいる。

1990 年代に入り、女の問題を起源とするフェミニズムが急に色あせた主張であるかのように思われるようになったことは否定できない。議論の中心はセクシュアリティの多様性に移り、男女の明確な差異を前提とする女性の問題に固執することは、むしろ保守的であるかのように受けとめられるようにもなる。1981 年にアメリカではじめてエイズの症例が報告され、エイズ禍に対する不安が誤解とともに広がったことは、同性愛者に対する差別的な制度や根強い差別意識を顕在化させるとともに、性の多様性への関心を高めることにもなったといえよう。性的指向を根拠とする不当な人権侵害が問われるようになると、身体による性の規定や区分の有効性は薄れ、フェミニズムはその議論の基盤を失ったかのような状況を迎えることになる。

しかし社会の差別的構造に対する異議申し立てとしてのフェミニズの展開は、抑圧と差別からの解放への示唆となりうるものであろう。フェミニズムということばをあえて手放したくはないという竹村和子は、「フェミニズムは、女に対して行使されてきた抑圧の暴力から女を解放することを意図しながら、同時にそのような『女の解放』という姿勢自体を問題化していくこと、つまり『女』という根拠を無効にしていくこと――まさにフェミニズムを、現在女と位置づけられている者以外に開いていくこと――である」と述べる。

本論文の中心的な柱であるフラーとソンタグをつなぐのはフェミニズムであるが、フラ

ーとソンタグの結びつきを決定づけるのは、ソンタグが残した一つの戯曲、*Alice in Bed* の存在である。ソンタグはこの戯曲にフラーを戯画化して登場させる。この戯曲にはフラーも含めて 5 人の女性が登場し、それぞれの抑圧を語る。中心となるアリスはアリス・ジェイムズをモデルとし、それにエミリー・ディキンソンが加わる。実在した人物に基づく登場人物のほかに、オペラ『パルジファル』の呪われた女性クンドリー、バレエ『ジゼル』のウィリーの女王ミルタが描かれる。ソンタグの作りだしフィクションと現実の交差する空間は、ルイス・キャロルが描きだす茶会の場面以上に理不尽な磁場を形成する。

ソンタグはフラーのペルソナを利用して *Alice in Bed* を作りだした。フラーは啓蒙主義のなかから生まれた平等と自由を信条とするアメリカで、女性であることの不都合を自ら経験し、それに対抗するためにヨーロッパの女性運動も、古典も、神話も、あらゆるものを活用した。そして女性の状況を伝えるペルソナを作りだした。フラーと同時代のホーソーンが描いた女性も、時代を異にするヘミングウェイが描いた女性も、思いどおりには生きることができない。グッド・ガールの仮面をかぶり、与えられた役割を演じてペルソナとなる。ペルソナの背後で発せられた刹那の輝きと声を、たとえ作者自身が聞こうとしなくても、読者は聞くことができる。抑圧された者の声に耳を傾けるという読みは、秩序を異化し、意識を変える。

コーネルの提唱する「イマジナリー・ドメイン」の理論を用いることによって *Alice in Bed* の読解の可能性を探ることは、ソンタグが意図したことの外にまで出ることになったのかもしれないが、作者を超えて文学を理解しようとすることは、作者を殺すことではない。作者によって生みだされた文学の空間に、さらにあらたな可能性を加えることである。作りだされたものが、作り手の意図よりもさらに多彩なものになる。バルトの「作者の死」を盾にとって、読者がテクストを自在に変えられるという認識に対して、荒このみは異を唱えている。作品を読むことは、「テクストの意味を発見する」ことにほかならないとイーザーは述べる。

「女とは何か」という問いは、問われたときにすでにパフォーマティブであり、「女」を問うこと自体が、フックスが述べるように、フェミニストとしての「選択と行動」である。文学という空間で「女」がどのように描かれ、「女」がどのように語らなければならいか、を問うことは、テクストのなかに「女」の隠れたことばを探すことであると同時に、そのようにしか描くことのできなかった作者の状況も問うことであり、読むことは作者の無意識との対話でもある。そして近代的自我からすっぽり抜けおちた女性のアイデンティティを言説的に再構築する試みは、女性のみならず、周辺化され、いまも権利から疎外されている者たちの声を聞くことと重なるものであるにちがいない。聞かれることのないまま、発せられることのないまま、沈黙を強いられてきた女のことばを文学テクストのなかに探りだし、登場人物たちや語り手のペルソナにあらたな意味を見出すことによって、それぞれに生みだされた作品がつながり、それらの声が共鳴しあう。そのなかから、あらたな自己イメージが導きだされていくとき、文学の可能性はさらに広がっていくことだろ

う。そしてそのような読みを実践することによって、まだキャノンから取りのこされている文学テクストにあらたな意味を見出し、抗拒の声に豊穣なる響きを聞くことが可能になるだろう。